

(2) 特集「東アジアの思索」

応募者：岡田 悠汰

題目：沈黙としての対話——『言葉についての対話』から間文化哲学へ

要旨

対話篇『言葉についての対話』(1953/54)においてハイデガーは、かつて彼のもとで学んだ九鬼周造の「いき」を話題にしたうえで、ヨーロッパ的な思考と東アジア的な思考の相容れなさを指摘しつつ、日本人に向けて、なぜ日本に根差したものを語るのに「概念」が必要なのかという問いを投げかけた。多くの日本の哲学者に多大な影響を与えたドイツの哲学者によって呈示されたこの問いは、西洋中心的な哲学観への反省と共に多元的な文化へと開かれた哲学観への転換が呼びかけられる現代において、日本人のみならず全ての哲学する者にとってますます差し迫ったものになってきている。

ハイデガーもまた、自らの存在の思索のよりどころを、そして哲学の起源を古代ギリシアに見出していることからして、西洋中心的な哲学観に基づいているようにみえる。たとえ彼が西洋形而上学との対決を通じたいわゆる「別の始原」への移行を唱道していたにせよ、それはあくまで彼の存在史的思索に基づいた西洋形而上学の始原への遡求と不可分である以上、彼の哲学は伝統的な西洋哲学の文脈に根差していることは疑いようもない。この観点からみれば、先のハイデガーの問いは、西洋中心的な哲学観に基づいたうえで、西洋の外に哲学はそもそも可能なのかという素朴な疑義を突きつけるものでしかないだろう。

しかし他方で、ハイデガー自身が東アジアとの対話が不可避であると認めていたことも事実である。このことに鑑みれば、件の対話篇はハイデガーによる東アジアの思索との対話の試みの現場に他ならないであろう。この意味でこの対話篇は、異文化間の哲学の対話によって西洋中心的な哲学観を再検討する「間文化哲学 *Interkulturelle Philosophie*」の先駆とみなしうる。しかし、この対話篇がドイツ文学者である手塚富雄との実際の対話をきっかけにしたものであるにせよ、ほとんどがハイデガーによる創作であり、その内容も彼自身の思索に牽強付会に引き寄せられたものであるかぎり、それは森一郎が指摘するように「疑似対話」に陥っているといえる。

したがって本発表では、この対話篇を間文化哲学の視野から再検討し、ハイデガー哲学の内部に真に「間文化的な対話」の可能性を見出すことを試みる。この際に留意したいのは、対話篇のなかの「問う人」であるハイデガーが、自らの思索において「間文化的な対話」による東アジア的な思索との出会いを必要としたということのみならず、「日本人」もまたヨーロッパ的な思索に基づく「概念」を必要としたということである。つまり真に「間文化的な対話」を考えるには、単に西洋中心な哲学観からの脱却を試みるという西洋から非西洋への方向のみならず、非西洋から西洋への方向をも考慮しなければならないであろう。なぜハイデガーにとって東アジアの思索との対話が不可避であるかを問うと同時に、われわれがなぜ哲学を必要とするのかを問う必要がある。さもなければ間文化哲学は、「哲学」のために非西洋的なものを消費するオリエンタリズムに陥る危険を免れえないであろう。

こうした対話が孕む「危険」は、まさにハイデガーが『言葉についての対話』において指摘したものである。この危険は、彼が「存在の家」と名指すわれわれの言葉に根差しているものであるが、対話の孕む危険は異なる「存在の家」と出会うとき、すなわち「間文化的な対話」において際立つ。ハイデガーによれば、「存在の家」の違いは単なる言語の違いではなく、言葉を通じた存在との関わり方の違いである。「間文化的な対話」においてわれわれは、常に自らの「存在の家」から出発して対話せざるを得ないがゆえに、自らの「存在の家」の枠組みで異なる「存在の家」を理解してしまう危険と隣り合わせなのである。

ハイデガーが指摘する対話の「危険」は、彼自身が対話篇のなかで避けがたく陥らざるを得ないものであったであろう。では、異なる「存在の家」の間には断絶のみがあり、それらを架橋する「間文化的な対話」はそもそも不可能なのであるか。ハイデガーは、対話の孕む「危険」を指摘する一方で、対話篇の最終局面では、ふさわしい対話のあり方が「語り」であるよりむしろ「沈黙」であることを示唆している。「沈黙」とは、ハイデガーが言葉の本質的なあり方として規定するものである。本発表では、この「沈黙」としての対話を出発点にして、間文化哲学へと接続することにより、ハイデガー哲学のなかにある「間文化的な対話」の萌芽を、真に「間文化的な対話」へと結実させることを試みたい。この際に論点となるのは、「沈黙」としての対話という発想の内実と「存在の家」の複数性との関係である。ここに焦点を当てることにより、ハイデガーにおける「沈黙」としての対話という発想を、文化の複数性と「間文化的な対話」がどのように成り立つのかという間文化哲学における問題へと接続することができるはずである。